第12回　源融の河原院と下寺町

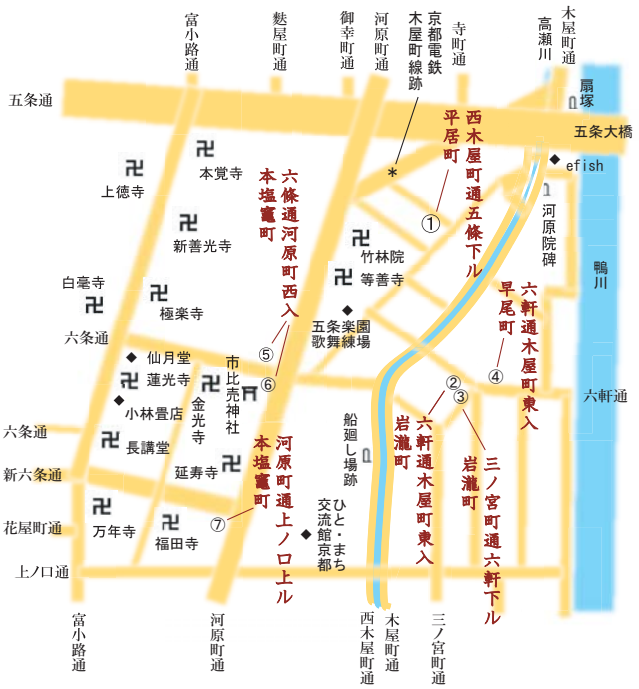
■ 源融河原院址

今回は、本シリーズ第８回でめぐった地域の南側を歩いてみましょう。第８回で紹介した扇塚のところから、少し迂回して五条河原町の交差点を渡ります。そこから、高瀬川まで五条通を東に戻ります。五条通から側道にはいって、高瀬川に架る小さな橋を渡りますと、木屋町通で、すぐに、二股になった榎が見えます。この榎は、榎大明神の神木として祀られており、写真でわかるように堂々とした大樹で、注連縄が張ってあります。平成十二年には、京都市の「区民の誇りの木」に選ばれています。

この榎の根元に、「此付近源融河原院址」（木屋町通五条下ル）の石碑があります。

河原左大臣こと源融〔八二二年～八九五年〕は、嵯峨天皇の第十二子。融流嵯峨源氏の祖。政治よりも風流を好んだと伝えられ、嵯峨にも別邸「栖霞観」を造営しました。これは、現在の嵯峨釈迦堂〔清涼寺〕で、源融の墓所でもあります。宇治に造営した別邸は、のちに平等院になって、現在に至っています。

源融は陸奥出羽の按察使として、多賀城に赴任したと伝えられています（実際には、遙任の形かもしれませんが）。その道中の途中、信夫（福島県）の文字摺石を見て詠んだとつたえられる歌



仁丹町名看板の所在（下寺町〔本塩竈町〕付近）

此付近源融河原院址の碑

が、古今和歌集に載っています。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへに
　みだれむと思ふ我ならなくに
　　かはらの左大臣

古今和歌集巻第十四・恋歌四・七二四

文字摺りは、捩ぢ摺り（よじれた文様）のことで、文字摺石の文様を染めたと伝えられる布。「みだれむと思ふ」をすこしだけ変えたかたち「みだれそめにし」として、小倉百人一首にも採られているのは、ご存じのとおりです。

源融の河原院とは、どんなところか。伝承によれば、塩竈（日本三景の一つ、宮城県の松島）にみたてた庭園をつくり、日ごと難波から海水を運ばせて藻塩を焼き、みやびを尽くしたといわれています。『都名所図会』巻之二では、「河原院の旧跡」の項があり、

五条橋通万里小路の東八町四方にあり。鴨川は此殿舎（でんしや）の庭中（ていちう）を流（ながるゝ）と見えたり。此所は、融左大臣の別荘にして、台閣水石風流をつくし、遊蕩の美を擅にし、山を築ては草木繁茂し四時に花絶えず、池を鑿ては水を湛へ、魚鳥は波に戯れ、陸奥の松島をうつし、難波津より日毎に潮を汲せ、管弦は仙台に調べ、文籍は月殿に翫び給ふ。大臣薨じ給へて後、寛平法皇此勝地に遊覧し、東六条院と号す。

その後、源融第三子の仁康上人のもとで、丈六の釈迦仏を安置し、六条院という寺院になったと記載されています。

河原院は、北は五条通（平安京の六条坊門小路）、南は六条通（六条大路）、西は柳馬場通（万里小路）、東は寺町通（東京極大路）で囲まれた広大な敷地を占めていました。この榎と石碑の位置は、寺町通の延長線よりすこし東側にありますので、敷地外になりますが、目をつぶっておきましょう。借景ということもありえますから。

■　大鏡にでてくる源融

ところが、源融は、風流だけの人ではないのです。なにしろ、藤原氏の専横が始まる時代に、左大臣まで昇った人です。『大鏡』上之巻の「太政大臣基経伝」には、陽成天皇が退位したとき（八八四年）に、「源融が自分も皇位継承の権利があると主張した話」

が載っています。このとき、「臣下に下ったものが天皇になった例はない」と藤原基経〔八三六～八九一〕が主張し、結局は光孝天皇が五五歳で即位しました（第5回参照）。該当の箇所を引用しましょう。

陽成院おりさせ給ふべき陣の定めに、さふらはせ給ふ。融のおとゞ、やんごとなくて、位につかせ給はん御心ふかくて、「いかゞは近き皇胤をたづねば、融らも侍るは」といひ出でたまへるを、この大臣こそ、「皇胤なれど、姓を給はりてたゞ人にてつかへて、位につきたるためしやある」と申し出でたまへれ。さもある事なれば、この大臣の定めによりて、小松の帝は位につかせたまへるなり。

『大鏡』上之巻・太政大臣基経伝

実際には藤原基経が陽成天皇を廃位に追い込み、光孝天皇〔小松の帝〕を擁立したというのが歴史的な事実です。光孝天皇の在位は、八八四年～八八七年の四年です。次の宇多天皇は、光孝天皇の皇子ですが、皮肉なことに、光孝天皇の臨終のときには、源定省として臣下に下っていました。藤原基経は、光孝天皇の崩御間際に源定省を皇太子に戻したうえで、後継の天皇とするという荒業をやってのけました。このやり方と同じく、陽成天皇を廃するときに、源融を皇太子に戻した上で天皇としてもよかったわけです。藤原基経にとっては、要するに傀儡としての天皇を擁立するのが目的で、理屈は時に応じてどうにもなるということです。これは想像ですが、源融は藤原基経の専横に嫌気がさして、風流の道に逃れ、河原院の造営に心血を注いだのではないでしょうか。

宇多天皇は、藤原基経の支持によって天皇となりますが、ときを経ずして、宇多天皇と藤原基経の関係が険悪となります。この確執が、次の醍醐天皇の時代に、菅原道真（宇多上皇のブレイン）と藤原時平（基経の長子）との政争につながってゆきます（第4回参照）。

■　伊勢物語と河原院

河原院が有名であったのは、いろいろな古典籍に記載されていることでも推察されます。『伊勢物語』の第八一段には、次のようにでてきます。

むかし、左の大臣いまそがりけり。賀茂河のほとりに、六條わたりに、家をいとおもしろくつくりて住み給ひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、（中略）この殿のおもしろきをほむるうたよむ。そこにありけるかたゐおきな、いたじきのしたにはひありきて、人にみなよませはててよめる。

鹽竈にいつか來にけむ朝なぎに
釣する舟はこゝに寄らなむ

となむよみけるは。（中略）さればなむ、かの翁さらにこゝをめでて、鹽竈にいつか來にけむとよめりける。

『伊勢物語』〔作者不詳、大津有一校注

岩波文庫三〇‐〇〇八‐一、岩波書店、一九六四）

この歌は、『在中将集』という在原業平〔八二五～八八〇〕の家集にもともと載っていたものが、伊勢物語第八一段に脚色されたと推測されます。さらには、ずっとのち、鎌倉時代最末期の一三二六年に、『続後拾遺和歌集』が撰進されますが、この集にも、「河原の左大臣の家にまかりて侍りけるに、塩がまといふ所のさまをつくれりけるを見てよめる」という詞書とともに、在原業平の歌（巻第十五・雑上・九七五）として収録されています。

■　宇治拾遺物語と河原院

『都名所図会』「河原院の旧跡」の引用文中にある寛平法皇とは、宇多上皇〔八六七～九三一、天皇在位八八七～八九七〕のこと。源融の時代からは、一世代あとです。本シリーズ第2回、第4回にでてきた菅原道真〔八四五～九〇三〕はそのブレインでした。古今集を編纂した紀貫之〔八七二？　～九四五〕は、源融の時代からおよそ二世代あとの人ですので、紀貫之の在世中には、河原邸は残っていたと考えられます。古今和歌集に載っている貫之の歌は、おそらく宇多上皇に献上される前の様子を詠ったものと考えられます。

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてのち、かの家に
まかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるをみてよめる　つらゆき

君まさで煙たえにし塩がまの
浦さびしくも見えわたる哉

古今和歌集巻第十六・哀傷歌・八五二

『宇治拾遺物語』巻第十二・十五（第一五一話）「河原の院に融公の霊住む事」と題して、河原院が宇多上皇に献上されたあとのことが記されています。

今は昔、河原の院は融の左大臣の家なり。陸奥の塩竈の形を作りて、潮を汲み寄せて鹽を焼かせなど、さまざまのをかしき事を盡して、住み給ひける。大臣うせて後、宇多院には奉りたるなり。

宇多上皇が住んでいると、融の幽霊がでてきて、「自分の家であるから住んでいるのに、あなたが住み始めたから狭くなってしまった」と恨みごとをいいます。宇多上皇が、「故大臣の子孫から献上されたので住んでいる。押し入って奪ったのならともかく、礼知らずにも怨むのは筋違いだ」と高らかにおっしゃると、幽霊は掻き消すようにいなくなりました。「さすがは、宇多上皇。普通の人ならば、融の幽霊に対して、このように、堂々ということはできない」と世人は噂したというあらすじです。同じ話が、『今昔物語』巻二七・二にも、「川原院融左大臣霊宇陀院見給語」として出ています。

■　河原院の荒廃と歌枕「塩竈」

源融の河原院は、宇多上皇の東六条院となったあと荒廃しましたが、そのあと、六条院という寺になりました。源融の子孫の

安法法師（生没年不詳）が住んで、応和二年〔九六二年〕に「庚申河原院歌合」を主催するなど、当時の歌人たちのサロンとなっていたと伝えられています。親交のあった恵慶法師（生没年不詳。平安時代中期）の河原院での歌。

河原院にて、あれたるやどに秋来といふ心を人々よみ侍りけるに　恵慶法師

やへむぐらしげれるやどのさびしきに
人こそみえね秋はきにけり

拾遺和歌集巻第三・秋・一四〇

この歌は、百人一首にも採られています。実をいいますと、百人一首を通じて知っていただけでしたので、この歌が河原院の跡で詠われたとは知りませんでした。河原院で歌われたと知れば、この歌の情趣はこれまでとは異なったものに感じます。

安法法師にも、家集が残っていて、その中に河原院をしのんで詠った歌が載っています。この歌は、上で引用した紀貫之の歌を踏まえています。

この河原院に、むかし、陸奥の国の塩釜の浦、浮島・籬の島、うつしつくられたりければ、大臣かくれたまひて後、躬恒・貫之など来つゝよめりければ、それがいとかぎりなければ人のよまぬを心みにとて、しのびによめる

年ふりて海人ぞなれたる塩竈の
浦の煙はまだぞのこれる

『安法法師集』一三

『平安私家集』〔犬飼廉、後藤祥子、平野由紀子校注、新日本古典文学大系二八、岩波書店、一九九四〕

平兼盛が河原院を訪れるといっていたのに、訪れないまま、天元二年〔九七七年〕に駿河守として下向してしまったので、多少の皮肉をこめて安法法師が詠んだ歌。贈る機会を逸してそのままになっていたという詞書が添えられています。

駿河守兼盛の君、あふ所ごとに、「院の塩釜まいりてよまん」といひけるを、来で下りにければ、ふみつくりくわへてよめりける、やらずなりにけり。

塩釜の浦はかひなし富士の嶺の
うつさましかばきてはみてまし

『安法法師集』二〇

平兼盛〔？～九九一〕は、三十六歌仙の一人。百人一首の「しのぶれど」の歌で有名です。注では、「あふ所ごとに」は「あふ折ごとに」の誤りとしています。多分、会うたびに安法法師が、自分の主宰する河原院のサロンを訪ねるように頼んだのでしょう。詞書からうかがえるのは、兼盛の生返事。兼盛が訪ねて歌を詠んだとなると、サロンの評判もぐっと上がったのに。安法法師の算段も捕らぬ狸の皮算用になってしまいましたね。

能の『融』では、六条河原院の跡にたどりついた旅僧の前に、前シテの汐汲みの翁があらわれて、かっての酒宴のさまを慕い、秋の月に照らされた京の名所について語るうちに、汐曇りにかき紛れて消えてゆきます。後シテの融大臣の霊があらわれて、塩竈の浦に心をよせ、籬が島の松陰の名月に小舟を浮かべたさまをしのび、「あら面白の遊楽や」と秋の月をめでつつ舞ったあと、月

の影が傾くとともに月の都に帰ってゆきます。

源融河原院の伝承を契機として、「塩竈」は、歌枕として数多くの和歌に詠まれるようになります。さらに、白川の関をこえた「みちのく」は、王侯貴族のあこがれの的となり、西行法師をへて松尾芭蕉の「おくのほそ道」につながります。

■　源氏物語の六条院

源融自身は、風雅の人として、紫式部「源氏物語」の光源氏のモデルとする説があります。また、その河原院は、光源氏が造営した六条院のモデルであるといわれています。『源氏物語』第二一「少女」の巻に、その敷地は四町とあります。

大殿、静かなる御住ひを、「同じくは広く見どころありて、ここかしこにおぼつかなき山里人などをも、集へ住ませむ」の御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御ふるき宮のほとりを、四町を占めて造らせ給ふ。

ここは、もともと秋好中宮（梅壺の女御）の母、六条御息所の邸宅のあったところ。光源氏の六条院は、北は六条坊門小路（今の五条通）、南は六条大路、西は万里小路（今の柳馬場通）、東は東京極大路（今の寺町通）で囲まれた敷地であったと考えられ、ちょうど源融の河原院の敷地に相当します。その四町を四つに分け、東南の町を春とし紫の上を、東北の町を夏とし花散里を、西南の町を秋とし秋好中宮を、西北の町を冬とし明石の上をそれぞれ住まわせるという壮大な設計です。大林組の『季刊大林』No. 34「源氏物語」〔一九九一〕に、光源氏の六条院を復元した記事「光源氏・六条院の考証復元」が載っています。インターネットでも公開されていますので、興味のあるかたはご覧ください。

http://www.obayashi.co.jp/kikan_obayashi/genji/

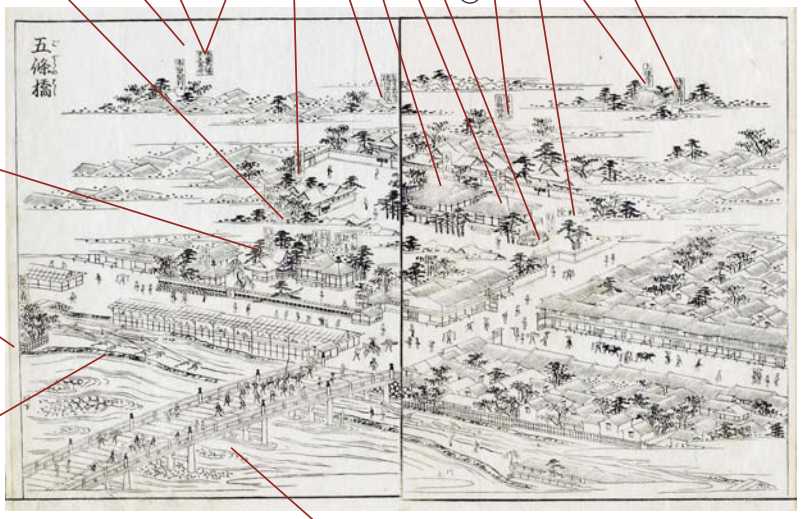
この復元図をみると、紫式部の構想力がすごいことが実感されます。

■　五条大橋

現在の五条通は、平安京の六条坊門小路です。豊臣秀吉が、方広寺の大仏への参道とするために、五条橋を六条坊門小路に架け替えたことから、五条橋通と呼ばれるようになりました。現在では、「橋」を省略して単に五条通と呼んでいます。『都名所図会』巻之二には、東北方面からみた五条橋（一七八〇年頃）の鳥瞰図が載っていますので、引用しましょう。

この鳥瞰図の下隅には、鴨川と高瀬川が平行して、右から左へ流れています。五条橋通と直角に交わっている通りは寺町通（京極通）です。五条橋の西詰の南側には、新善光寺御影堂が大きく描かれています。時宗に属し、豊臣秀吉の京都改造の際にここに移転。御影堂扇で有名であったことは、第８回の最後で紹介しました。

この鳥瞰図を仔細にみると、松豊八幡宮（門出八幡、首途八幡）が描かれています。首途八幡の西に描かれた新善光寺御影堂の本堂の北に「鏡の池」が、南に方丈を隔てて塩竈井」が、描か



『都名所図会』巻之二 五条橋の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

れています。鳥瞰図の左下隅に籬の森の札が書いてあり、柵で囲んだ、それらしい木立が描かれています。上で引用した『都名所図会』「河原院の旧跡」の記載のうしろに、割注として、

五条橋の南、鴨川高瀬川の間に森あり、これを籬（まがき）の森といふ。河原院の遺跡なり

と記されていますから、「此付近源融河原院址」の碑の側にある榎（えのき）は、籬の森の名残かもしれません。

新善光寺御影堂は、太平洋戦争中に五条通拡幅のため、滋賀県長浜市に移転しました。拡幅まえの五条通は、現在の五条通の北側歩道部分の幅程度であったといいますから、御影堂の境内のほとんどが削りとられたことになります。その名残は、五条通南側の地名に「御影堂町」として残るだけになっています。

確認のために、現在の地図を見ると、河原町五条の交差点の東南側は、三方を道路（五条通、河原町通、斜めの道）に挟まれた三角地（御影堂町）になっています。この三角地の部分と、今は五条通の車道・南側歩道になっている部分とをあわせた区域（全部ではないかも知れません）が、御影堂の境内であったということになります。

三角地の南、斜めの道は、実は、京都電気鉄道（木屋町線）の路面電車が走っていた跡地です。この電車は明治二八年〔一八九五年〕から昭和二年〔一九二七年〕まで、京都駅を始点にして、現在の河原町通からこの斜めの道を通って、木屋町通を二条まで北上していました。そういえば、五条寺町の交差点（今では五条通を渡れなくなっています）の東北側歩道上に、この斜めの道の

延長の痕跡（北に向かうと、左側は店舗、右側は小さな三角緑地帯）が残っていて、木屋町に達するようになっています。なにげないところに曰くがあるものですね。いままでは、「なぜこんな風になっているのだろう」という疑問さえもわかなかったのですが。

ちなみに、河原町通は、市電の伸長とともに、北から整備拡幅されています。昭和二年〔一九二七年〕に、河原町五条下ル（平居町）で京都電気鉄道（木屋町線、狭軌を広軌化）と繋がり、現在の河原町通を経路とする市電が開通しました（京都駅まで延びたのは一九二九年）。これに伴って、京都電気鉄道（木屋町線）が一九二七年に廃止されました。その市電も今は廃止されています（昭和五三年〔一九七八年〕に全線廃止）。

「此付近源融河原院址」碑の北側に、「efish」（木屋町通五条下ル西橋詰町）。カフェとイベント。鴨川に面した奥の席は、ゆりかもめを見ながら、ゆったりとした気持ちでコーヒーが飲めます。

■ 五条新地

高瀬川に架る榎橋を渡って、「此付近源融河原院址」碑の対岸へ。高瀬川の東岸沿いに延びる通りから分かれて、南に延びる通りは、西木屋町通。この通りに、町名看板「西木屋町通五條下ル平居町」①があります。

このあたりは、豊臣秀吉の京都大改造のときに築かれた御土居の外側に沿った地域で、宝暦年間〔一七五一～一七六四〕に「五条新地」として開発されたところです。「五条橋下」の遊所として、北野上七軒から茶屋株を分派して遊里としたといわれています（『京都市の地名』）。これより南にも、すでに、六条新地、七条新地と呼ばれる遊郭ができていました。のちに、「五条楽園」と呼ばれるようになり、大いに繁栄しました。現在でも、看板や建物などに、その面影が残っています。写真は、木造三階建の五条楽園歌舞練場（西高瀬川筋五条下ル平居町）。

西木屋町通　五條下ル　平居町①

歌舞練場から、東方向（正確には東南方向）に進む道が六軒通。高瀬川に架る橋を渡ってさらに進むと、町名看板「六軒通木屋町東入岩瀧町」②があります。ここは、三叉路（Y字路）になっていて、西南かどの建物にはってあります。

同じ建物の東側側面、三ノ宮町通に面したところには、町名看板「三ノ宮町通六軒下ル岩瀧町」③があります。六軒通は、ここで少し曲がりますが、さらに東に進むと町名看板「六軒通木屋町東入早尾町」④にゆき当たります。町名看板②と④は、基準の場所が同じで、町名が違うだけです。

町名看板②～④がある五条楽園界隈の写真を載せておきましょう。これまでに出てきた平居町、岩滝町、早尾町は、源融の河

原院の一部にあたります。さらには鴨川沿いの都市町、波止土濃町、八ツ柳町など、高瀬川沿いの聖真子町、梅湊町なども源融の河原院の敷地の一部です。

上方落語の『三十石夢の通い路』（桂米朝全集第四巻）に、五条新地（橋下）のことが出てまいります。小話に仕立ててあって、面白い。すこしだけ変えて、上品な艶笑話として紹介しましょう。

三条大橋、四条大橋、五条大橋が集まって、自慢話をしております。三条大橋は、「先斗町があるから、色気のある女が通る」と自慢します。四条大橋は、「東に祇園・宮川町、西に先斗町で、両手に花や。色気のある女が、

六軒通　木屋町東入　岩瀧町②

三ノ宮町通　六軒下ル　岩瀧町③

仰山通る」と強気にまくしたてます。五条大橋は、「橋下があるし、三条大橋と同じくらい別嬪が通る」と、負けずと対抗しますが、やや弱気。一同「やっぱり、景気のよいのは、四条大橋や」となったところで、「でもな」と、四条大橋。「なんぼ、女が通っても、肝腎の擬宝珠がない。三条と五条がうらやましい。」

そういえば、三条大橋と五条大橋には擬宝珠があるが、四条大橋には擬宝珠がありませんね。擬宝珠があるのは、三条大橋は東海道の基点、五条大橋は伏見街道と渋谷街道の基点であったためです。これに対して、四条大橋は、八坂神社への参道。ここにも、京都の歴史が顔をのぞかしています。

六軒通（ろっけんどおり）　木屋町東入（きやまちひがしいる）　早尾町（はやおちょう）④

五条楽園界隈

■　高瀬川の船廻し場跡

木屋町通の一つ東、南北の通りは、三ノ宮町通といいます。この通りを南下し、上の口通にでて、高瀬川を渡ると、ひと・まち交流館京都（西木屋町通上の口上ル梅湊町）があります。ここは、元の菊浜小学校の跡地。その裏手の高瀬川沿いに、船廻し場跡の記念碑があります。当時はこのあたりの川幅は九メートルほどあり、岸が砂浜となった船廻し場であったとのこと。「菊浜」の名称は、もともとの所在地の「菊屋町」と「浜」の地名から合成したもの。ひと・まち交流館京都の北側、菊浜グランドとして「菊浜」の名前が残っています。

船廻し場跡の碑

高瀬川は、角倉了以・素庵父子が慶長十六年〔一六一一年〕から同十九年〔一六一四年〕まで四年をかけて開鑿した運河です。方広寺（大仏殿）を造営するための資材運搬が鴨川の水運によって行われたことにヒントを得て、安定した資材供給のために計画したもの。北は二条から、伏見を経て、南は宇治川まで。このあ

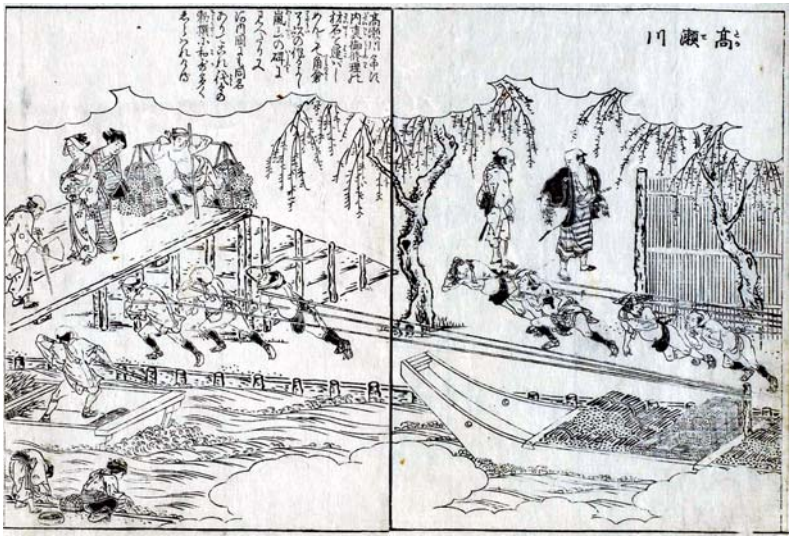
たりは、豊臣秀吉が築いた御土居の外側を開鑿しています。大正九年〔一九二〇年〕に廃止されるまで、原材料・生活物資の京都移入、京都の物産の搬出に貢献しました。

引用した『都名所図会』の五条橋図の中で面白いのは、「籬（まがき）の森」と記載された場所に、高瀬舟の舟曳きの様子が描かれていることです。一方、上流の五条橋の北側には、高瀬舟を船頭が一人で操作して、高瀬川を下っている様子が描かれています。当時の高瀬川の水運の様子がうかがえます。

さらに調べてみると、『拾遺名所図会』にも、「高瀬川」の挿絵が載っており、高瀬舟の船曳きの様子が詳しく描かれております。引用した挿絵をみると、高瀬舟が連結されて、一艘ごとに三、四名の曳き手で曳いたことがうかがえます。また、曳き手が通行するため、高瀬川に架る橋が一段高いところにつくられています。そのため階段で登り降りするようになっていて、車馬の通行はできない構造になっています。

■　下寺町の寺々、等善寺と竹林院

豊臣秀吉の京都改造のときに、御土居が築かれました。御土居の遺構は、このあたりに今は残っていませんが、高瀬川が御土居の西側に沿って開鑿されたことを考えると、御土居の大体の位置がわかります。京都改造のときに、築かれた御土居の内側、ちょうど六条河原院の故地のに、たくさんの寺が移築されました。現在でも、五条通、六条通、高倉通、河原町通に囲まれた地域に、その多くが残っています。この地域は、古くは下寺町と呼ばれ、



『拾遺都名所図会』巻之二　高瀬川の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

現在の町名「本塩竈町」に、源融の河原院の名残が残っています。

先ほどのひと・まち交流館京都の南側の通りは、上の口通。ここから河原町通に出て、東側の歩道を北上しますと、浄土宗等善寺（河原町通五条下ル平居町）があります。上述の五条楽園歌舞練場の北側にあたります。面している通りは違いますが、同じ平居町。等善寺は、上で引用した『都名所図会』巻之二 五条橋の鳥瞰図にも「等善寺・橘行平の塚」として載っており、寛平五年〔八九三年〕橘行平の建立と伝えられます。

等善寺の北側、同じ平居町の町内で、河原町通に面したところには、浄土宗竹林院（河原町通五条下ル平居町）があります。『都名所図会』巻之二には、「鬼頭天皇」の項があり、「本覚寺の東南、竹林院の堂内にあり」と説明したあと、割注でその由来を紹介しています。

> 正安二年の春、後伏見院北山に御幸ありし時、北面葛原兵部重清供奉し、朝霧といふ官女を見初め、連理の交をなす。父これを制して、又八重姫を娶に、朝霧ふかく嫉、水食を断て死す。重清これを菩提の種とし、出家を遂、紀伊国二鬼嶋へ赴き、庵を結び、苦楽坊と號し、行ひすまして居たりける。然るに疫病をうけて苦悩す。時に朝霧が亡魂鬼女と現じ、苦楽坊の頭を撫れば、忽平癒す。功つもりて共に成佛し、末代其證として頭をのこし、鬼頭天皇と號しける。

鬼頭天皇が現在も祭られているかどうかは、調査不足でわかりません。気になる逸話ですので引用しましたが、出典など不明です。もう少し調査をしたいと思います。

■　金光寺と市比売神社

五条河原町の交差点から、今度は、河原町通の東側の歩道を南下しましょう。六条通を西に入りますと、北側の民家に、町名看板「六條通河原町西入本塩竈町」⑤が貼ってあります。ちょうどその向かい、南側の民家にも、同じ町名も看板「六條通河原町西入本塩竈町」⑥があります。

六條通　河原町西入　本塩竈町⑤

六條通　河原町西入　本塩竈町⑥

町名看板⑥の隣には、市比売神社（市賣比神社、六条通河原町西入本塩竈町）の鳥居が、社務所兼集合住宅の一階部分にはめ込まれています。さらに、その西隣には、金光寺があります。市

比売神社の創建は金光寺より古いようですが、中世以降、金光寺の鎮守となっていました。今は、金光寺から独立しています。

『都名所図会』巻之二には、「市中山金光寺」の項があり、

時宗にして、本尊阿弥陀佛は定朝の作、開基は空也上人なり。初は、堀川七条の北にあり。今の本願寺境内なり。むかし此地賣人の市場たるにより、市屋道場ともいふ。

と紹介しています。「市中山金光寺」の項の中に副項目として「市比賣社」があり、「當寺にあり、此邊の産沙とす。祭りは五月十三日」と説明しています。

「堀川七条の北」とは、西本願寺の南、今の興正寺のある地域で、平安京の東市の位置にあたります。『京都市の地名』では、『山州名跡志』を引いて、次のように説明しています。

空也上人承平年中〔九三一～九三八〕に、上人、市姫の神勅を得て開きし所なり。薬師仏を以って本尊と為す。今の薬師是なり。

もともとは天台宗であったが、一遍上人が京都に布教に来た時に、金光寺の住職であった作阿上人が一遍上人に帰依したことにより、時宗の一派（市屋派）の本山になったと伝えています。弘安七年〔一二八四年〕、一遍上人の三度目の入洛のとき、空也上人が念仏を広めたことにちなんで、金光寺に大がかりな踊り屋を立てて、踊り念仏をおこなったことが、『一遍聖絵』などの記載からわかります。中世には、市姫金光寺として七条堀川の地で庶民の信仰を集めていましたが、豊臣秀吉の京都改造の際、本願寺の移転に伴い、天正十九年〔一五九一年〕に、市姫神社（市比売神社）とともに、現在の下寺町に移りました。江戸時代は、六条道場あるいは市屋道場と呼ばれていました。前に引用した五条橋の図の中にも、市屋道場として描かれています。天明の大火、どんどん焼で類焼。

市比売神社（市姫神社）は、平安京の東西の官設市場の守護神として、延暦十四年〔七九五年〕に創建されたと伝えられています。祭神は、多紀里毘売命、市寸嶋比売命、多岐都比売命、下光比売命、神大市比売命で、最初は三座（ちなみに、最初の三柱の神様は、宗像大社の祭神と共通です）。二柱はあとから追加されたようです。市屋道場の金光寺縁起の中には、「延暦十四年〔七九五年〕、宗像大神を東市屋に勧請し市姫大明神と号した」とあるそうです（『京都市の地名』）。鎌倉時代以降は、金光寺とともに移動して今日に至っています。

東市の守護神ということから、商売繁盛の神として崇敬されるようになりました。商売繁盛のご利益に関しては、丹波口にある京都中央卸売市場の開設に際して、分社した市姫神社が下京区花屋町通新千本西入ル朱雀分木町にあります。平安京の「東市・西市」と現在の京都の「京都中央卸売市場」、どちらも、生活用品流通の要です。

また、祭神がすべて女神であることから、「女人厄除」の神様としても有名になりました。良縁・子授け・安産の御利益もあるそうです。市比売神社は、平安時代を通じて、皇室、公家の崇敬が篤く、「五十日顆之餅」神事がおこなわれ、「市之餅」と名づけ

市比売神社と天之真名井

た産餅が授与されたと伝えられています。ちなみに、「五十日之祝儀」（あるいは「百日之祝儀」）とは、生後五十日（あるいは百日）の赤子の口に、餅を含ませ、成長を祝う儀式です。今も残る「お食べ初め」の原型の行事で、市比売神社はその発祥の地だといわれています。

『源氏物語』柏木の巻に、「五十日の祝」がでてきますので紹介しましょう。光源氏の妻、女三宮が柏木と通じて設けた若君（薫）。生まれた直後に、女三宮は出家します。その若君の五十日の祝。

御五十日に餅参らせたまはむとて、容貌異なる御さまを、人々「いかに」など聞こえやすらへど、院渡らせたまひて、「何か、女にものしたまはばこそ、同じ筋にて、いまいましくもあらめ」とて、南面に小さき御座などよそひて、参らせたまふ。

「容貌異なる御さま」とは、女三宮が髪を切って尼となった様子。「小さき御座」は、五十日の祝の品々を盛った高杯を並べた場所。

紫式部の伯父の藤原為頼〔九三九？～九九八〕の家集『為頼朝臣集』には、市姫神社の五十日の祝を詠んだ歌があります（『京都市の地名』）。

今の左大弁の御子の五十日におほわりごの蓋に市姫のかた

ちなどかけるところに　　為頼朝臣

市姫の神の忌垣のいかなれや
商物に千代を積むらむ

『為頼朝臣集』

「破籠」とは、檜の薄い板で作った弁当箱状の容器で、中に仕切りがあり、被せ蓋がついています。楕円形の曲物、四角い弁当型のものなどがあります。たとえば、ちょっと豪華な昼食に食べる松華堂弁当の容器がそれです。それにしても、「蓋に市姫のかたち」とは、どんなかわいい絵が描いてあったのでしょうか？　祝いの和歌には、「五十日」にちなんで、「いか」の語をできるだけ多く詠み込むことがおこなわれました。この歌でも、「忌垣」（古くは、濁点を表記しませんので、「いかき」）と「いかなれや」の「いか」が詠み込まれています。

『康平記』〔平定家、康平元年～五年の日記〕の康平五年〔一〇六二年〕十一月二日の条に、五十日の祝が出てきますので、引用しましょう（この引用文は、西村眞次「日本古代市場の研究」〔『早稲田

法学』、一九三一・三・二五、http://hdl.handle.net/2065/1486）の孫引きです）。例によって、振りがなと送りがなは仮につけたものです（「尅」は、異体字「尅」を使うことも多いが、原引用のままにしておきます）。

十一月二日。若宮御五十日也。（中略）辰尅民部卿親任家司、右衛門府生成任知事家、向東市買餅豫兼日仰市刀禰等令用意。以絹一入夜左衛門督已下公卿被参。有疋米一石爲其直。饗饌盃酌事。亥尅供餅。

この日記の主、平定家は、摂政関白藤原頼通〔九九〇～一〇七四〕（道長の長子、宇治平等院造営）の家司。文中の「若宮」は、この当時内大臣（のちに関白）であった藤原師実〔一〇四二～一一〇一〕（頼通の子）の子（師通〔一〇六二～一〇九九〕）。平安時代には、月の前半は東市、後半は西市が開かれる慣例になっていたといいます。引用文は月の初めですから、東市が開いていたことになります。この文章からわかることは、東市に、藤原師実の家司の民部卿親任と知家事の右衛門府生成任が出かけていって、予約していた餅を買ったこと。その値段は、絹一疋と米一石で、結構高いですね。多分、お祝いの品で、特別注文だったのでしょう。夜になって、宴会のあと、亥尅（亥の刻、今の午後九時～十一時）に五十日の祝がおこなわれたことがわかります。

引用文中の市刀禰はというのが、よくわかりません。ただ、平安時代の官職として、坊長の下に、保刀禰というのが置かれていたといいます。この類推で、東市にもそれに相当する下級役人があり、これを、市刀禰と呼んだと考えても、まんざら荒唐無稽ではありますまい。あるいは、「刀禰」が神職の下で働く者を差すこともありますので、市姫神社の下役であった可能性もあります。

市比売神社の裏手に、ご神水「天之真名井」があります。社伝によれば、清和天皇から後鳥羽天皇まで二七代にわたって、御降誕ごとに御産湯の中にこの水を加えるのが慣わしであったといいます（『改訂京都風俗志』）。これは、平安時代のことですから、市比売神社が七条堀川の地に鎮座した時代のこと。時代はずっと下って、江戸時代初期、『都名所図会』巻之二、「市中山金光寺」の項の中に、上に引用した箇所に続いて、「天眞井」は、「本堂の西にあり。洛陽の名水なり」と記しています。前に引用した五条橋の図の中には、「市屋道場・天真名井」が一つの名札に並んで書いてあり、「市姫大明神」は別の名札になっています。江戸時代以前の神仏習合の状態を示していて、天真名井がどちらに属していたのかをはっきり示すという意図はなかったのでしょう。

写真の「天之真名井」の井桁の上に奉納してあるのは、願いごとを書いた「姫みくじ」。天之真名井は、ポンプアップして、常時水が流れるようになっているようです。そのほかにも、神水のお持ち帰り用に、蛇口が用意してありました。

■ 延 寿 寺

市比売神社のある通り（六条通）を戻り、もう一度河原町通にでて、南に少し歩くと、延寿寺の門が開いています。二層に

なった山門が特徴で、その前に「勅願所金佛殿延壽寺」の門標が建っています。この寺の名前は、本シリーズ第2回に、町名看板にあった「上金仏町」や「卜味金仏町」の由来で、でてきました。後白河上皇の六条殿に建てられた長講堂が、一時衰退したときに、その三尊（金仏）を受け継いで、延寿寺と号したといいますが、時期は不明です。もとの寺域は、油小路、東中筋通、五条通、六条通で囲まれた地域（中金仏町、卜味金仏町、天使突抜三町目、天使突抜四町目を一部分ずつ含む）。天正十九年〔一五九一年〕に豊臣秀吉の京都改造の際に、現在の地に移転。そのあとも、何回か火災にあったが、本尊の金仏は無事に伝えられたといいます。しかし、どんどん焼（元治の兵火）のときに、伝来の金仏が溶解。その後木造で再建。現在の建物は、明治十五年〔一八八二年〕に再建。

■福田寺

延寿寺の南側の道は、現在、六条通と呼ばれています。ところが、仁丹町名看板⑤と⑥でわかるように、市比売神社の前の通りが、もともとの六条通です。延寿寺の南側の道（新六条通）が河原町通へ突き当たる丁字路の西南かどに、町名看板「河原町通上ノ口上ル本塩竈町」⑦があります。この位置だと「河原町通六条下ル本塩竈町」と表示されるはずです。これは、この町名看板を設置した時点（一九二九以前）には、新六条通がなかったことを反映しています。実は、新六条通は、少なくとも、昭和六年〔一九三一年〕の地形図（国土地理院）には、存在しません。おそらくは、この新道も、太平洋戦争のときに、強制疎開によって造られたと推測されますが、さらに調査が必要です。

河原町通　上ノ口上ル　本塩竈町⑦

（新）六条通に沿って、時宗福田寺の北塀。門は、六条通に交差する南北の通り（名称不詳）にあり、西面しています。福田寺の名は、すでに、木製の町名看板「高倉通松原下ル西入福田寺町」（本シリーズ第7回参照）のところで出てきました。寺伝によれば、文永九年〔一二七二年〕鎌倉幕府将軍宗尊親王が京都に戻ってのち、剃髪して堯空と名乗り、東山区渋谷の地に創建したといわれています。初めは、天台宗。のちに、弘安五年〔一二八二年〕時宗に改め、汁谷（渋谷）道場と称しました。豊国神社造営にともなって、慶長三年〔一五九八年〕に、福田寺町（高倉通松原下ル）に移転し、しばらくして、現在の下寺町へ再移転したと伝えられています（『京都市の地名』）。現在、福田寺町の北には、長香寺（慶長十四年造営）がありますので、この造営が、福田寺の再移転に関係している可能性があります。天明の大火、どんどん焼（元治の兵火）のときに焼失。現在の建物は、そのあとの再建。

■　長講堂と後白河法皇

（新）六条通を西へ、万年寺（門は富小路通に西面）を過ぎると、六条富小路の交差点にでます。右折して、富小路通を北上しますと、右手に、後白河法皇ゆかりの寺、長講堂があります。門標には、「元六條御所長講堂」とあります。

長講堂

後白河法皇〔一一二七～一一九二。天皇在位一一五五～一一五八。崩御するまで院政をおこなう〕は、保元の乱（一一五六年）、平治の乱（一一五九年）を生き抜き、安元三年〔一一七七年〕の鹿ケ谷の陰謀で、院政をとめられ鳥羽殿に幽閉されるも、治承四年に〔一一八〇〕に以仁王が平氏追討の失敗のあと復活し、平氏と源氏のあいだを巧みに泳いで天寿を全うした強運の持ち主。生涯に、熊野御幸は三四回（第一回は一一六〇年）。今様に入れあげた結果は、『梁塵秘抄』として今に残っています。その中から、一首引用しましょう。

仏も昔は人なりき、我等も終には仏なり、三身仏性具せる身と、知らざりけるこそあわれなれ

『梁塵秘抄』巻第二・二三二〔後白河院撰述、一一八〇頃成立。『梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』、小林芳規他校注、新日本古典文学大系五六、岩波書店、一九九三〕

後白河法皇が最後の御所としたのが、六条殿で、寿永三年〔一一八四年〕頃に始まったといわれています。場所は、左京六条二坊十三町（北は楊梅小路、南は六条大路、東は西洞院大路、西は油小路で囲まれた部分）。六条殿内の持仏堂として開基されたのが、長講堂で、正式には「法華長講弥陀三昧堂」といいます。六条殿は、文治四年〔一一八八年〕焼失。その年に源頼朝によって再建。このとき、長講堂も再建され、「法華長講弥陀三昧堂」の勅額を掲げました。再建後、建久元年〔一一九〇年〕に、頼朝は、再建なった六条殿で、後白河法皇に拝謁しています。後白河法皇が、この六条殿で崩御したのが、一一九二年。この年に、鎌倉幕府が開かれているのは、日本史の学習で「一一九二つくる」の語呂合わせで覚えさせられました。要するに、後白河法皇は、源頼朝が征夷大将軍になるのを死ぬまで拒み通したということです。後白河法皇の死後、長講堂領と呼ばれる九十箇所ちかい荘園は、

持明院統の経済的基盤となりました。長講堂自体は、火災に何度もかかり移転を重ねましたが、豊臣秀吉の京都改造の際に、現在の地に移転しています。

長講堂の本尊は、丈六の阿弥陀三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）。三尊とも重要文化財。後白河法皇御真影（非公開）があり、これをもとに江戸時代に彫刻した後白河法皇御尊像（重要文化財）があります。後白河法皇自筆の「過去現在牒」が残っていて、平清盛、源義朝、源義行（義経）などが記されています。源義経を義行と書くのは、藤原（九条）良経〔一一六九～一二〇六〕との混同を避けるため。

■ 後白河法皇の「過去現在牒」と義王・義女

後白河法皇の「過去現在牒」は、『平家物語』にもでてきます。それは、白拍子、義王・義女の話。「義王・義女」は、「妓王・妓女」とも「祇王・祇女」とも書きます。「義王・義女の話」は、『平家物語』の冒頭の「奢れるものも久しからず、唯春の世の夢の如し。猛きものも遂には滅びぬ、偏に風の前塵におなじ。」という名文句を際立たせるための伏線です。奢れるもの、猛きものの代表として、平清盛の行状が描かれています。

平清盛の寵愛を、新参の仏御前に奪われた義王は、妹の義女と母のとぢのもとで出家します。出家の直接の原因は、清盛と仏御前の前で、今様の舞を強要されたこと。『平家物語』〔百二十句本（京都本）、第六句「義王出家」の直前〕を日本文学電子図書館 J-TEXSTS から引用しましょう。

落つる涙をおさへて、今様一つうたひける。

月もかたぶき夜もふけて、心のおくを尋ぬれば、仏も昔は凡夫なり、われらも遂には仏なり、いづれも仏性具せる身を、へだつるのみこそ、悲しけれ

と、泣く泣く二三返うたひたりければ、その座に並みゐ給へる一門の公卿、殿上人、諸大夫、侍にいたるまで、皆感涙をぞ流されける。入道もおもしろげにて、「時にとりては神妙に申したり。この後は、召さずともつねに参りて、今様をもうたひ、舞などをも舞うて、仏をなぐさめよ」とぞ宣ひける。義王かへりごとに及ばず、涙をおさへて出でにけり。「親の命をそむかじと、つらき道におもむき、ふたたび憂き目を見つるくちをしさよ」

この今様の趣旨は、上述の『梁塵秘抄』のものと、ほぼ同じ。ただし、「知らざりけるこそあわれなれ」を「へだつるのみこそ、悲しけれ」と変えているところに、「仏御前と実力は変わらないのに、なぜ義王だけを遠ざけるのか」という気持ちがこめられています。清盛入道の「舞などをも舞うて、仏をなぐさめよ」は、義王の気持ちを逆なでする言葉。もちろん、その中の「仏」は、「仏御前」のこと。義王は、返答にも窮して、悔しさにうち震えます。この仕打ちをわが身に重ねて、無常を感じた仏御前も、三人のもとに来て尼となります。四人ともども、仏道にはげみ、往生の本懐をとげます。同書、第六句の後半「四人後白河法皇の過去帳にある事」では、次のように記します。

四人一所にこもりゐて、朝夕仏の前に花香をそなへ、余念もなくねがひければ、遅速こそ有りけめども、四人の尼ども皆往生の素懐をとげけるとぞ聞こえし。されば、後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「義王、義女、仏、とぢが尊霊」と四人一所に入れられけり。哀なりし事共なり。

長講堂は、普段は非公開ですが、たまに特別拝観で見せることもあります。その機会があれば、この四人の名前を過去現在牒の中に探しましょう（ちなみに第四一回京都非公開文化財特別拝観（二〇〇五年十月）で、長講堂が公開されていました）。

■ 後白河法皇と大原御幸

『平家物語』が出てきたついでに、終盤〔第百十九句〕、後白河法皇の「大原御幸」について触れましょう。平氏の滅亡後、大原の里に隠棲した建礼門院（平清盛の娘、高倉天皇の中宮、安徳天皇の母）のもとを、文治二年〔一一八六年〕に、後白河法皇が訪ねます。この御幸は、時期的にみて、六条殿から出発したと考えられます。「大原御幸」は、『平家物語』の主題である「諸行無常」をしめくくる場面。後白河法皇にうながされて、建礼門院は、生きながらに体験した六道を述べます。天道、人道、修羅道、畜生道、餓鬼道になぞらえて、来し方を述べたあと、地獄道の阿鼻叫喚とともに海に沈んだ一門の最後を語ります。

（前略）さて年月を送る程に、過ぎにし春の暮に、先帝をはじめ奉り、一門ともに門司赤間の波の底に沈みしかば、残りとどまる人どもの喚き叫ぶ声、叫喚 大叫喚の地獄の底に落ちたらんも、是に過ぎじとぞ聞こえし。

建礼門院は意に反して捕らえられ、京都に送られる途中に、平家一門が竜宮城でお経を唱えている夢を見たと語ります。

さても又武士共に捕はれて上り候ひし時、播磨国明石浦とかやに着きたりし夜、夢幻とも分かたず、（中略）「是はいづくぞ」と申ししかば、二位の尼、「是は竜宮城」と答へ申せし程に、「あな目出たや、是程ゆゆしき所に苦しみは候はじ」と申せば、二位の尼、「此の様は、竜畜経に見えて候ふぞ。それをよく見給ひて、後世とぶらひ給へ」と申すと思ひて、夢はさめ候ひぬ。是をもつてこそ六道を見たりと申し候へ。わが身は命惜しからねば、朝夕是を嘆く事もなし。いかならん世にも、忘れがたきは安徳天皇の御面影、

二位尼は、平清盛の正妻、時子のこと。建礼門院徳子の母、安徳天皇の祖母。「竜畜経」というのは、架空の経文。竜宮城にいても、まだ畜生道にあるとの意味でしょうか。

■ 蓮 光 寺

長講堂の山門の北、富小路通の東側に畳屋（小林畳店）があります。わたしが通りかかったときに、ちょうど外国人観光客の団

体が畳について、案内人から説明を受けていました。聞き耳をたてていましたら、畳のことは、tatami-mat と英訳しておりました。外国人の観光も、有名どころを見るという形態から、普段の京都を見るという形態に変わっているのか？　それにしても、この下寺町は、日本人観光客でさえ滅多に訪れない界隈なので、おもわず写真を撮ってしまいました。あとから見ると、どうということもない情景ですが、記念に載せておきます。

畳屋を見物する外国人観光客の一団

畳屋の北側に山門が見えますが、これは、負別山蓮光寺（富小路通六条上ル本塩竈町。この六条は、新六条通）。寺伝によれば、明応元年〔一四九二年〕に真盛上人が新町高辻に草庵「萱堂」を結んだことにはじまり、当初は天台宗。天正十九年〔一五九一年〕豊臣秀吉の京都改造の際に現在地に移り、浄土宗に改めたといいます。二世順誉蓮光上人のときに蓮光寺と改称。洛陽四八願寺中の第三十五番。建物は、天明の大火、どんどん焼（元治の兵火）で焼失。明治二三年〔一八九六年〕に再建。そのあと、昭和五八年〔一九八三年〕に改修。

蓮光寺

本尊は、阿弥陀如来。一名、負別如来といいます。『都名所図会』巻之二には、「負別阿弥陀佛」の項目があり、

来迎堂の南蓮光寺にあり。この本尊は、嘉禎年中に東國の僧都に登りて、佛工安阿弥に阿弥陀佛の像を願ふ。

像成就し、帰らんとする時、安阿弥、此尊像希代なりとて、甚をしみ、今一度拝せんと、跡を慕ふて趨る。山科郷にて追つき、此旨を語るに、かの僧則笈を開けば、尊像分身して二體となる。二人とも奇異の思ひをなし二尊を東西に負ふて別る。其地を今山科の負別といふ。安阿弥が負帰し尊像當寺本尊なり。

さて、東国に持ち帰った一体はいかに？　仙台市泉区福岡の阿弥陀堂に同様の伝承があり、「笈分如来」と称して、宮城県指定有形文化財となっています。文中安阿弥とは、快慶のこと。ただし、嘉禎年中は一二三五～一二三八で、快慶は嘉禄三年〔一二二七年〕には故人であったとの記録があります。この安阿弥は、快慶の様式（安阿弥様）を継いだだれかということにしておきましょう。

上掲の五条大橋の鳥瞰図に、蓮光寺と同じ名札に並んで「首斬地蔵」と書いてあり、『都名所図会』巻之二の本文では「馬止地蔵」として説明しています。

石仏なり。此尊像土中に埋れ有りし時、平清盛　駒に乗じて通りしに、馬途に止て進まず。不思議をなして掘らしむるに、此石像出現せり。夫より六條河原の斬罪の場にありしといふ。

馬が止まった話は、保元三年〔一一五八年〕のことと伝えられています。約二メートル七〇の巨像で、現在は、「駒止地蔵尊」と呼んでいるようです。引用文の記載では、別名の「首斬地蔵」の名は、六条河原の刑場にあったためだととれますが、別に、「盗賊に襲われた信者を守り、身代わりになった」という伝承もあります。駒止地蔵は、京洛（洛陽）四八願所地蔵尊の第四五番にあたります。

この寺には、大阪夏の陣で活躍し敗れた、長宗我部盛親の墓があります。この人物の生涯は、波乱万丈。墓があるのは、一時寺子屋の師匠をしていて、蓮光寺の住職と親交があった縁といいます。

ここで和菓子の紹介。蓮光寺の北隣、旧六条通との丁字路の南に、和菓子「仙月堂」（富小路五条下ル本塩竈町）。烏羽玉など。「仙」がついているのは、仙太郎の暖簾分けと聞いています。

■ 太子堂白毫寺

旧六条通との丁字路を過ぎてすぐ、富小路通に東面して、白毫寺（富小路通五条下ル本塩竈町）があります。通称は、太子堂。宗旨は律宗。本尊は聖徳太子自作と伝えられる聖徳太子立像（南無仏という）。開基は、忍性律師。もとは、知恩院近く（粟田口）にあったが、慶長八年〔一六〇三年〕、知恩院の再建拡大のときにここに移したと伝えています。天明の大火、安政の大火、どんどん焼のときに類焼。現在の建物は、そののちの建立。

■ 上徳寺―世継地蔵

白毫寺の北、同じく富小路通に東面して、浄土宗上徳寺（富小路通五条下ル本塩竈町）があります。慶長八年〔一六〇三年〕に、徳川家康の帰依を得て、伝誉一阿が創建、開基は家康の側室・阿茶局（上徳院）。本尊阿弥陀如来は、安阿弥快慶作の伝承があり、滋賀県の鞭崎八幡宮から、家康が移したと伝えられています。天明の大火、どんどん焼で類焼。現在の本堂は、明治時代に、永観堂祖師堂を移築したもの。

上徳寺と世継地蔵（上徳寺境内）

境内のお堂にある地蔵尊（二メートル余りの石像）が、子授け、安産のご利益で信仰を集めており、世継地蔵とも呼ばれます。お堂に奉納された額には、いずれも、次のご詠歌が記されています。

世續地蔵尊大菩薩御詠哥

ありがたやめぐみふかきを千代かけて
いゑの世つぎをまもるみほとけ

上掲の五条橋の鳥瞰図（『都名所図会』）には、上徳寺の鎮守として、「塩竈明神」が示されています。本文には、「鹽竈社は、上徳寺の鎮守なり。祭る所融左大臣にして」との記載がありますが、今はないようです。上徳寺の所在地は源融の河原院の伝承にもとづき、本塩竈町。しかも、山号は「塩竈山」。ご住職の苗字も「塩竈」です。さらに、塩竈明神があれば、「いうことなしの揃い踏み」なのですが。

■ 極楽寺

白毫寺の斜向かい、富小路通に西面して、浄土宗極楽寺（富小路通五条下ル本塩竈町）があります。『京都市の地名』によると、もともとは、天文十二年〔一五四三年〕に、一蓮社笈誉が四条坊門東洞院（今の一蓮社町）で創建。一五九〇年〔天正十八年〕に豊臣秀吉の命により、現在の地に移りました。天明の大火、どんどん焼で類焼。現在の建物は、そのあとの建立。境内の地蔵尊は、極楽寺地蔵と呼ばれ、摂津国住吉の井鼻から移転したと伝えています。京洛（洛陽）四八願所地蔵尊の第四六番、手引地蔵（安産地蔵）とも呼ばれます。

■ 新善光寺

極楽寺から北に進むと、富小路通に東側、路地を入ったところが広くなっていて、西面して新善光寺（富小路通五条下ル本塩竈町）の山門が開いています。宗派は、浄土宗。来迎堂新善光寺と呼ばれ、今回の五条大橋のところで説明した御影堂新善光寺（第8回でも説明）とは別です。なお、今熊野にも新善光寺がありますが、また別の機会に紹介しましょう。

新善光寺（来迎堂）

『都名所図会』の「来迎堂新善光寺」の項を引用しましょう。耳慣れない仏教用語が出てきますので、この機会に勉強です。

来迎堂新善光寺は、本覚寺の南にあり。本尊阿弥陀仏は信濃國善光寺と同一體なり。本田善助如来の示現を蒙りて、百済国へ渡り齊明王の閻浮檀金七斤を賜つて帰朝し如来を鑄とて爐壇を構ければ其光中より分身の尊像現れ給へり。是當寺の本尊なり。

閻浮樹がでてきたところで、ちょっと寄り道。『阿毘達磨倶舎論』〔世親、ヴァスバンドゥ、五世紀ごろ〕の「世間品」の中に記述されている仏教世界観では、中心に須弥山があり、その東西南北にある四つの島のうち、南にある島を閻浮堤（別名、贍部洲。モデルはインドの地）といいます（定方晟『須弥山と極楽』〔講談社現代新書三三〇、講談社、一九七九〕）。この島が人間が住んでいるところ。閻浮堤には、中央から北に黒山、その北に雪山、さらにその北に香酔山があります。その南麓、つまり雪山と香酔山のあいだに無熱悩池という大きな池があり、このほとりに閻浮樹（贍部、ジャンブー、果実は甘くて美味という）の大木が大森林をなしているといわれています。この島の地下には、八大地獄（等活地獄、黒縄地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、無限（阿鼻）地獄）があるといいます。

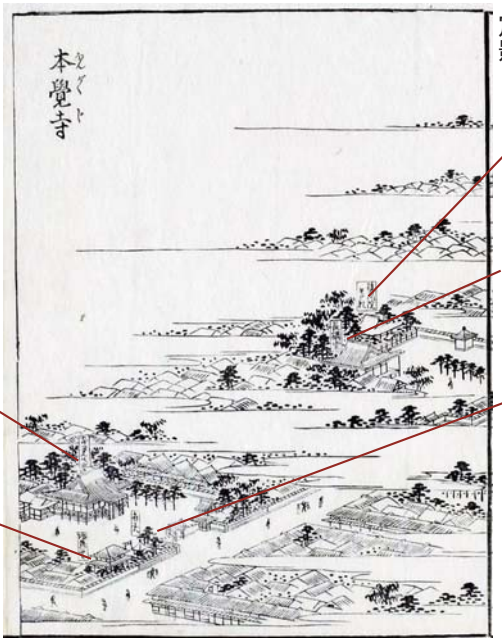
閻浮檀金とは、閻浮樹の森を流れる川底から採れる砂金。きわ

めて良質・高貴な金の比喩。本田善助は、信州善光寺を創建した本田善光の子。この伝承は、信州の善光寺の縁起を踏まえたものです。とくに、「炉の光の中から阿弥陀如来が現れた」という伝承は、共通しています。応仁の乱後は各地を転々。天正十九年〔一五九一年〕に、豊臣秀吉の京都改造のときに現在の地へ。

■本覚寺

新善光寺の北に、本覚寺（ほんかくじ）（富小路通五条下ル本塩竈町）があります。浄土宗。鎌倉時代〔一二二二年〕に、将軍源実朝の後室・坊門信子（法名本覚）が、西八条の偏照心院内にて創建。そのち、梅小路堀川に移転。応仁の乱のあと一時衰退したが、文亀三年〔一五〇三年〕に、高辻烏丸（現在の釘隠町・山王町のあたり）に方一町の寺地を得て、玉翁上人によって浄土宗寺院として中興（これらの町名は本シリーズ第９回にでています）。一五九一年〔天正十九年〕に豊臣秀吉の命により、現在の地に移りました。天明の大火、どんどん焼で類焼。現在の建物は、慶応三年〔一八六六年〕の建立。本尊の阿弥陀仏（一名、如法仏）は安阿弥の作と伝えられています。江戸中期の版元、八文字屋自笑の墓があります。源融座像と塩竈神社の扁額が残されています。

『都名所図会』巻二には、「本覚寺」の往時の鳥瞰図が載っています。引用した図でわかるようには、本堂のほか弁天堂と地蔵堂が描かれています。寛文年間〔一六六一～一六七三〕に定められたという京洛（洛陽）四八願所地蔵尊の第四八番「泥付地蔵」が本覚寺にあったといいますので、このお堂がそうかもしれません。



『都名所図会』巻之二 本覚寺の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

本塩竈町（下寺町）付近は、古くは、豊臣秀吉の京都改造のときに御土居を建設したことと西側が六条三筋町（第６回参照）の開設で道筋が変わったことが原因で、道筋がわかりにくい。さらに、明治時代以降も、河原町通や（新）六条通が付け加わるなど、かなり変貌しています。このため、東西の通りが真っ直ぐに

つながっていないなど変則的で、町名看板の記載内容に戸惑うことがあります。街路の変遷を、古地図によって考証することも面白そうですが、今後の課題として残しておきましょう。

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フィルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第７回）2008/03/21

© 2007, 2008 藤田眞作 http://xymtex.com